第三者意見

蟹江 憲史氏
慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科 教授

東京工業大学准教授を経て現職。慶應義塾大学 SFC 研究所 xSDG・ラボ代表。東京大学未来ビジョン研究センター客員教授、日本政府 SDGs 推進本部円卓会議構成員、内閣府地方創生推進事務局自治体 SDGs 推進のための有識者検討会委員などを務める。

本報告書を通して、農林中央金庫のサステナブル経営が着実に進展しているという印象を持ちました。新たにサステナビリティ・アドバイザリー・ボードを設置し、外部有識者の意見を取り込んだうえで、取組みを定点観測できるガバナンス体制を構築したことは評価できます。また、さまざまな事例を現場に近い担当者の声を通じて紹介している編成は、農林中央金庫の目指す方向が読者にわかりやすく伝わります。非財務情報の開示手法が確立していない中で農林中央金庫ならではの開示になっていると思います。

気候変動のシナリオ分析については、今回物理的リスクにおいて、農業分野を先駆けて開示したことは、リスクへの対応の観点からも評価できます。今後も、この分野の研究は進展していくことが予想されます。外部との連携も図りながら継続的にアップデートのうえ開示していただきたいと考えます。

また、食農関連事業等へのバリューチェーン構築に向けた取組み、マイクロプラスチックによる海の生態系や漁業への影響を軽減する取組み、林業や木材流通等を促進する取組みなど、農林水産業を基盤とする農林中央金庫だからこそできる取組みについては、チャレンジングではありますが期待したいと思います。

ダイバーシティ＆インクルージョンについて、取組みを進めていることは評価できます。一方、SDGs のゴール 5 では 2030 年にジェンダー平等達成を目指しているように、世界ではこの分野での取組みは進展しています。難しい課題でありますが、多様な働き方、障がい者、LGBTQ などを含めた多様性の側面からも、今後ますますの取組みの進展を期待します。

ESG データの開示内容を拡大したことについても評価できます。足元 3 年のデータ比較が可能となり、継続した分析ができるようになりました。一方で、非財務情報は数値化できない情報も多いため、定性的な動向も時系列に整理してあわせて掲載することで、企業価値の評価向上につながるのではないでしょうか。

最後に、本報告書の内容を通じて、改めて農林水産業は、サステナビリティの分野に深く関わっていることを認識しました。パンデミックや戦争、気候変動などの地球規模の課題について考える際に、人間と自然の適切な距離についての議論が起こりました。その適切な距離を確保する手段として、農林水産業の在り方に注目が集まっているように思います。つまり、農林水産業は地球と人間の関係を考えるうえで重要な位置にあるのではないでしょうか。農林中央金庫にはこうした課題を地球規模の視点で捉えて、サステナブル経営を進めてもらえるものと強く期待しています。

第三者意見を受けて

常務執行役員
チーフ・サステナビリティ・オフィサー
北林 太郎

この度は貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。2021年からパーパスを起点としたサステナブル経営を実践してきましたが、誌面でもご紹介しているとおり職員一人ひとりが自らの業務として取り組み、徐々にではありますがパーパスを自分ごと化できるようになってきていると感じています。今後は、本日いただいたご意見、そしてステークホルダーの意見や期待を十分に踏まえたうえで、「農林中央金庫だからこそやるべき活動、農林中央金庫ならではの活動」を意識していきながら、サステナブル経営を進めてまいります。